人生わずかに八十年

福元　忠一

昔、人生わずかに五十年、満で数えて四十九年という歌があった。

戦後、我が国は長寿国となり、こんなに目出度いことはないし、医学の飛躍的進歩など、有難いことと思っている。

短い人生で、一番の人生観に影響を与えたのは、七十九歳で生涯を閉じた父だろう。

父は、人間は普通に暮らせば良いのだ。他人に迷惑を掛けないで、ことさらに成功や、出世をしないで、大儲けもしないでそれで良いのだと。

祖父の代で火事を出し、小学校もまともに出ないままで逃げるように大冒険としての出稼ぎ先は、鹿児島市内で、見込まれて、米問屋の馬車引き頭、戦中・戦後の波乱の一生を終えた父の人生訓には説得力があり、感化を受けた。

大学進学する者は少ない時代で、大学は行かなくてもよい。算盤は稽古するな、弾かせる者になればよかのだぐらいで、普通の人生論の影響を受け、自らの人生も、普通に暮らし、先祖の家系も、戸籍制度の以前のことと、大陸からの渡来でモンゴル系黄色人種であるぐらいの外は定かでない。

また、家を新築することもなく、四人の子供が成長し、四人の孫が家族を和ませ、質素な暮らしで時たまの旅行などを楽しみ．気がつくと、夕日は東シナ海に没するような人生になろうとしている。

いくら短い人生とて．この期に及んで回顧

録だか認めようにも、活字に残そうものなら、数多くの．正・政・清・聖・性・醒談には、人目を憚ること甚だしく、ひたすらに、あるいはにんまりと、あるいは泪し、心の中で繰り返していることだ。

この、大事な人生を、いつの日にか、壷に入り、桐の小箱に納まる日まで、開けないことにしておこう。

（元入来町長）

薩摩川内市入来町のパワースポット ～ 銭積石